



東陽病院内科医師

鈴木健士

健康ウォッチング

横芝町のみなさんが毎年受けて

いらつしやる住民検診について

今回はみなさんが毎年受けていらつしやる住民検診についてお話ししたいと思います。住民検診では（ガン検診も含め）血液、尿、便、胸部レントゲン、心電図、胃バリウム検査、他に内科検診、乳房触診、子宮検査などが行われていきます。これらの検査・診察でなにか異常があればを医療機関を受診し、さらに詳しい検査がなされます。しかし、異常ありといわれた方の中にも問題となる異常のない方もたくさん含まれていますし、逆に異常なしの方の中にも異常が見つかるともありません。医師の中には検診は百害あって一利なしと言いつり、本ま

住民検診について

う研究がなされています。結論から申し上げますと検査をしなくても生存率に有意な差は出ないという結果となったそうです。しかし、これは検査をやっても一つの病気も見つからず、一人の患者も助かっているという意味ではありません。レントゲン検査によって早期の病変が見つかり、それによって尊い命が救われることはもちろんあるのです。しかし、何万人の検査が行われ、その中でほんの少数しか差がでなければ結果としては有意な差とはいえないということになります。しかし、たった一人の命でもそれは地球よりも重い命であることは誰でも知っていることです。一つの命でも救えればその検診は成功であると言えるくもないかもしれません。また検査を行う際の危険を考えればあえてする必要はないという意見もあります。確かにどんな検査でも危険が全くないというのはないかもしれませんが、しかし、それをいえば点滴ひとつでも事故の可能性はあります。結

局は十分注意して行うしかないかと思えます。

現在言われている検診不要論は決して検診を受けなくていい、という横着者の免罪符ではありません。検診を信念をもって受けない方がいることを私は否定するつもりはありません。しかし、受けないのであれば、ぜひ自分なりに健康を守る努力をして頂きたいとお願ひしたいと思います。

医療や健康に関する質問をお寄せください。このページでお答えしたいと思います。質問は、手紙やハガキ又はFAXでお願いします。たくさんのご質問をお待ちしています。

あて先 光町宮川二・一〇〇
東陽病院広報担当
FAX 84-2882

お詫びと訂正
5月号17ページ「健康ウォッチング」で、東陽病院鈴木健士先生の担当診療科が、産婦人科となっていました。内科の誤りでした。
お詫びして訂正いたします。



53

ペットのしつけ

しかるだけでなくほめることも

犬や猫を飼う場合、近所に迷惑をかけないマナーを教えることが大切です。

犬は生後二か月くらいから、「よし」「だめ」「まで」などの基本的な命令を理解させ、三〜四か月ごろから社会的なルールを身につかせます。

散歩のときは引き綱を短めにしっかりと持ち、犬にいつも同じ側を歩かせます。前や横に飛び出すことが多ければ、綱を強く引いて人間の歩調にあわせて歩くことを覚えさせましょう。

散歩の途中でほかの犬や人に吠えたりうなったりした場合は綱を引き「だめ」としかり、行儀よく散歩ができるようにしつけます。

「吠え声がうるさい」と近所から苦情を受けてしまった場合はどうすればいいのでしょうか。理由のないむだ吠えをやめさせるには、しかることは逆効果。犬に「よし、わかった。やめ」と声をかけ、やめたら「よしよし」と体をなでてほめてやりませう。これを繰り返していれば、むだ吠えをしなくなるはず。犬と違い、猫は生来の自由主

義者。飼い主の命令に従って喜びを感じる動物ではありません。しかるより、行儀よくできたときにほめることが大切です。

猫を放し飼いにするときは、近所に「ご迷惑をかけます」と声かけて気配りをしていくことも必要。庭に入り込んだり悪さをしたりしたら追い払つてもらうように言っておきます。

それでも庭草を荒らしたり、オスの場合はテリトリーのアピールのためにおしっこをするなど、迷惑をかけてしまうことがあります。

近所から苦情を受けたときは、猫の通り道をふさいだり、市販の忌避剤スプレー（猫の嫌いなにおい）を利用したりして猫の行動範囲を制限する工夫をしましょう。

